褐色細胞腫市民公開シンポジウム
開　催　報　告

平成 21 年 1 月　国立病院機構京都医療センター　成瀬光栄

開催日時：2008 年 12 月 6 日（土）13:00～17:30
場所：東京国際フォーラム　ホール D1
参加者：　計　105 名
主催：京都医療センター内分泌代謝高血圧研究部・
　　日本内分泌学会褐色細胞腫検討委員会
後援：日本内分泌学会・日本高血圧学会・日本高血圧協会・日本心血管内分泌代謝学会・東京内科医会・日本核医学会分科会・腫瘍免疫核医学研究会・日本内分泌病理学会・日本癌学会
発起人：成瀬光栄　（京都医療センター）
　　平田結喜緒　（東京医科歯科大学）
　　宮森　勇　（福井大学）

背　景

東京国際フォーラムにて「褐色細胞腫市民公開シンポジウム」を開催した。一般と医療関係者を合わせて 105 名を超える多くの方が参加された。長時間のプログラムにもかかわらず、最後まで多くの方が熱心に聴講された。

褐色細胞腫は内分泌性高血圧の代表疾患で、適切な診断と手術により治癒可能である。しかし、その一部は遠隔転移を伴う悪性褐色細胞腫で、初期診断の困難さに加えて、診断されてもその治療法は未確立である。即ち、褐色細胞腫は良性疾患と、悪性疾患との両面を有しており、初期には両者の鑑別が困難な難治性疾患である。

これまでの活動

我々はこれまで、関連診療各科の医師によるワーキンググループを立ち上げ、シンポジウム開催などの取り組みを行ってきたが、内分泌学会の臨床重要課題となって後、1）検討委員会立ち上げ、2）診療アルゴリズムの提案、3）診断基準の提案、4）診療指針の作成、5）SDHBなどの遺伝子解析に関する見解などをまとめてホームページに掲載してきた。この様々な取り組みの中で、褐色細胞腫の社会的認知度の低さが認識されたことが、今回の市民公開シンポジウム開催の背景である。

シンポジウム

先ず、日本内分泌学会の重鎮で、癌研究会有明病院名誉院長である尾形悦郎先生に疾患の歴史、特徴、課題につき、オーバービューして頂いた。次いで、成瀬はワーキンググループの活動に基づき、問題提議をおこなった。続いて、山崎　力氏が疾患登録の意義と課題、松田公志、織内　昇、立木美香、河野　勤の各氏は治療の現状と今後について、竹越一博、木村伯子氏は遺伝子解析、病理診断からの早期診断の可能性についてご講演された。

特別　講演

患者中心の医療を目指し、「患者学」や「癒し」を提唱されている日本医科大学医療管理学高柳和江先生にお願いした。長年の小児外科医としての経験を基にした、新たな「がん医療のあり方」に関する話は、医療関係者にとっても、一般の方にとっても、新鮮で心が明るくなる大変印象的な講演であった。

一般には馴染みの少ない「褐色細胞腫」に関する初めての市民公開シンポジウムであったが、多数の方が参加され、多くの質問がなされた。Closing remark にはわが国の褐色細胞腫研究の第一人者、東北労災病院院長三浦幸雄先生に今後の展開について概説頂いた。

褐色細胞腫に対する取り組みは始まったばかりである。今回の市民公開シンポジウムが今後の更なる進歩に少しでも役立てば幸いである。

（謝辞：開催にご協力頂いた関連各学会、東京内科医会、帝京大学名誉教授清水直容先生に深謝致します）

（会場風景）